

私たちは大洪水で地のすべての生き物を「消し去った」神の残酷さに恐れを抱き、不信感までも覚えるかもしれません。しかしこの物語は、ノアの子孫の視点から読むようにと記されています。日本人も韓国人もどの民族も、ノアの子孫であることに変わりはありません。そこで求められているのは、「主が命じられたとおりに」という従順と、すべての時間を支配する神の救いを待つ忍耐です。

ここには驚くほど詳細な日付が描かれています。暗黒の嵐の中では、神が時間を支配しておられることが励ましになるからです。私たちの人生にも、ノアの時の大洪水のような暗黒の世界が襲ってくるかもしれませんが、ノアのように「神とともに歩む」者に、神は耐えられない試練を与えはしません。そこに必ず救いの道が備えられます。

1. 「ノアは、すべて主(ヤハウェ)が命じられたとおりにした」

「これはノアの歴史である」(6:9)とは、2章4節「天と地が創造されたときの経緯」、5章1節の「アダムの歴史の記録」とあるのと同じ英語の Genesis の語源のことばが用いられます。

その上で、「ノアは正しい人で、彼の世代の中であって全き人であった。ノアは神とともに歩んだ」(6:9)と記されます。「全き人」とは何の欠点もない完璧な人という意味ではなく、「神とともに歩む」という神との交わりの生活を意味します。これは5章22, 24節でエノクに用いられた言葉です。そして、3人の息子への言及があります。

そして6章11, 12節で、「地」の「墮落」と「暴虐で満ちている」様子が描かれます。これは癌細胞のように神の創造のみわざを無に帰する状況でした。

先の6章5-7節では、「主(ヤハウェ)は…地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」と描かれていましたが、「悔やむ」の原語は「哀しむ」「哀れむ」とも訳されます。神は冷酷に「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう…」と言われたのではなく、「わたしは、これらを造ったことを悔やむ(残念に思う)」とご自分の痛みの思いを繰り返して表現しながら、さばきを決断しておられます(6:7)。その上で、ノアを通しての世界の救済計画が示されます。

最初に、主はノアに、「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ようとしている。地は、彼らのゆえに暴虐で満ちているからだ。見よ。わたしは彼らを地とともに滅ぼし去る」(6:13)とご自身の計画を明かされます。

「滅ぼし去る」とは、11, 12節で「墮落し」「乱していた」と繰り返されていたのと同じ語源のことばです。つまり、主は、すでに自壊していたものを、目に見える形で壊すと言っておられるのです。すべての国は、外からの攻撃によって滅ぼされるのではなく、内側から滅びると言われるのと同じです。

その上で、主は、「あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい」と命じます(6:14)。「箱舟」とは、舟ではなく「箱」という意味で、後にモーセの誕生の際に、彼を入れてナイル川に流した「かご」も同じことばが用いられています。「ゴフェルの木」が何かは分かりません。最近の英語訳では Cypress(糸杉)と訳されることがあります。

そして主は、その巨大な「箱」の設計図を与えてくださいましたが、その大きさは、長さが約140m、幅が約23m、高さが13.5mという途方もない三階構造の建造物でした。以前、「ノア」という映画があり、それ

は鑑賞をお勧めすることができないような非聖書的なストーリーですが、箱舟の大きさだけは、聖書の記述通りだったと言われます。

その舟がどれだけの年月をかけて造られたかは分かりません。最初に神の命令を聞いたのが「セム、ハム、ヤフェテを生んだ」頃であるなら(6:10)、洪水まで約百年間あったこととなります(5:32,7:11)。その間、ノアは人々の嘲笑を受けながら、黙々と働き続けたと思われまゝ。とにかく、主は十分な時間を用意してくださったことでしょう。

なお6章17,18節では、洪水が全世界的なものであることが描かれながら、「しかし、わたしはあなたと契約を結ぶ」と、ノアに約束されたことが強調されています。それは、ノアの息子たちとその家族、またすべての生き物の種類の中からそれぞれ雄と雌を二匹ずつ救い出すという約束でした。

また、大洪水の間、それらすべての動物を養うための食料の確保も命じられました。そして、その結論として、「ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行なった」(6:22)とまとめられます。それこそ「神のかたち」に造られたものとしての生き方であり、「ノアは主(ヤハウェ)の心にかなっていた」(6:8)ことの意味でした。

箱舟が完成した時、主(ヤハウェ)はノアに「あなたとあなたの全家は、箱舟に入りなさい」(7:1)と仰せられました。その際、「すべてのきよい動物の中から…七つがいつつ」(7:2)と、洪水後のいけにえの動物のことまで配慮されます。

そして主(ヤハウェ)は、「あと七日たつと、わたしは、地の上に四十日四十夜、雨を降らせ…すべての生けるものを大地の面から消し去る」(7:4)と、ノアに大洪水までの正確な日数と、その後の雨の日数を正確に知らせていただきました。

そしてここでは、大量の食物を積み込むというような働きの記述も省略されて、ただ、「ノアは、すべて主(ヤハウェ)が彼に命じられたとおりにした」(7:5)とだけ描かれます。

しかも7章7-9節を見ると、ノアと家族の場合は、「箱舟に入った」と記されている一方で、すべての種類の動物に関しては、「雄と雌がつかいになって箱舟の中のノアのところにやってきた。神がノアに命じられたとおりであった」と記されています。

ノアがたった七日間ですべての動物から雄と雌二匹ずつ選ぶのはとうてい不可能でしょうが、神ご自身がそれぞれの動物を動かしてくださったのです。6章19節ではノアに「連れて入る」ように命じられていましたが、箱舟の入り口まで導いたのは主ご自身でした。

そして「ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日」という具体的な日付とともに、「大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた」(7:11)と描かれます。「大いなる淵」とはヘブル語の「テホーム」で、天地創造の原初の状態に全地を覆っていた「大水」を指します。つまりこれは、神が無秩序を生むことではなく、創造の原点に戻ることを意味します。

その際、天からの雨ばかりか、地中の水も一挙に湧き出て地を覆ったことでしょう。これが一瞬に起きなければ、人々が箱舟に殺到することを止められません。

その上で、「こうして、いのちの息のあるすべての肉なるものが、二匹ずつ箱舟の中のノアのいる箱舟の中に入った…それから、主(ヤハウェ)は彼のうしろの戸を閉ざされた」(7:15,16)と描かれます。つまり、最

も困難な働きは主ご自身が担われ、その上で、主ご自身が戸を閉ざされて、ノアと家族と動物たちを守るという断固とした意思を示されたのです。厳しいさばきのただ中に、主のあわれみが描かれています。

2. 「神は心に留めておられた、ノアと彼とともにたすすべての獣や・家畜を」

そして、「大洪水は四十日間、地の上にあった。水かさが増して箱舟を押し上げた・・・こうして、主は消し去られた、地の上の生けるものすべてを・・・それらは地から消し去られ」(7:17,23)と記されます。

「消し去る」(拭い去る)という繰り返しに心が痛みますが、それと同時に「ただノアだけが残った。彼といっしょに箱舟にいたものたちだけが」(7:23 私訳)と、神が何よりもノアに目を留められ、ノアといっしょのものが救われたと描かれています。

そして、「水は百五十日間、地の上に増し続けた」(7:24)と簡潔に記されますが、その間の箱舟の中の暗闇と不安、ノアとその家族の労苦の描写は一切省かれています。

その一方で、「神は覚えておられた、ノアと、彼とともにたすすべての獣やすべての家畜を」(8:1 私訳)と、神の守りが強調されます。そして続く、「神が・・・風(霊)を吹き渡らせた」という表現は、天地創造の初めの「神の霊が水の面(おもて)を動いていた」(1:2)を思い起こさせ再創造が示唆されます。

その結果が、「水は百五十日の終わりに減り始め」(8:3)、大洪水の始まりからちょうど五か月後の同じ日「第七の月の十七日」に、「箱舟はアララテの山地(トルコ北東部)にとどまった」と描かれます(8:4)。これは、主ご自身が水を減らし始めたと同時に、箱舟の着地点を定めてくださったことを意味します。

それからなお 73 日間も経過した「第十の月の一日に、山々の頂が現れ」、さらに「四十日」経って初めて、ノアは「箱舟の窓を開き」、鳥を放ちます(8:6,7)。

また、それから鳩を三回に分けて放ちます。最初の鳩が戻ってきてから「七日待つて」二回目に鳩を放ったとき、鳩は「オリーブの若葉」をくわえて帰って来ました。大洪水の苦難を超えた若葉はどれほどの感動を生みだしたことでしょう。

当教会の「光の十字架」はその背後のスタンドグラスに固定されていますが、そのためにオリーブの木のイメージが用いられています。大洪水も十字架も滅びの象徴ですが、それを通して新しい祝福の世界が生まれたからです。

ノアはそれからなお「七日待つて」三度目に鳩を放って水が引いたのを確認します(8:12)。これらの箇所での四十日とか七日という数字の繰り返しに、ノアの忍耐が象徴的に表現されています。

そして、8章13節では、「第六百一年の第一の月の一日」になってという新しい年の始まりが強調されながら、「ノアが、箱舟のおおいを取り去って、ながめると、見よ、地の上はかわいていた」と感動的に描かれます。

ただ、かわききるまでさらに 56 日間も待った「第二の月の二十七日」になって初めて、神はノアに「箱舟から出なさい、あなたは、妻と息子たちとその妻たちとともに」(8:16)と命じられました。

これらを合わせると、彼は 370 日間も狭くて暗い箱舟の中に留まっていたことになります。これらにノアの従順な忍耐が見られます。

ペテロは後に、「当時の世界は水におおわれて滅びました。しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで、保たれている」

(Ⅱペテロ 3:6,7)と語りましたが、神はこの地に広がる悪をやがて裁かれます。

ノアと家族が救われたのは、「神とともに歩んだ」からです。私たちは洪水ではなくバプテスマ(の水)を通して神の民とされ、狭い箱舟ではなくキリストのからだである教会の交わりを通して、神のさばきを免れるのです。教会では、キリストの御霊を受けた者たちが、互いのユニークさを尊重し、互いに仕え合い、愛の共同体を建て上げて行きます。

3. 「わたしはあなたがたと契約を立てる」

主はノアに、「あなたとともにいる生き物すべてが…あなたとともに出るようにしなさい。それらが地に群がり、地の上で生み、そして増えるようにしなさい」(8:17)と命じられました。

主はノアを用いて地の生き物を守り、その後の繁殖までを見守るというのです。これはノアが、「神のかたち」としての「すべての生き物を支配せよ」(1:28)と創造の初めに命じられていた本来の使命を全うすることを意味します。

その後、ノアは自分から進んで、「主(ヤハウェ)のために祭壇を築き…全焼のささげ物を献げ」(8:20)しました。きよい動物は七つがいつつ収容されてはいましたが(7:2)、彼は、心を痛めながら、共に生き延びた動物を献げたことでしょう。

その思いが主のみこころを動かし、「主(ヤハウェ)は、その香ばしいかおりをかがれ」、「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらしはしない」と仰せられました(8:21)。

ただ、その際、「人の心が思い計ることは、幼いときから悪であるからだ(あるにもかかわらず)」ということばが付け加えられます。6章5節でもほぼ同じ表現が用いられ、そのことのゆえに大洪水を起こすと記されましたが、ここでは、それにも関わらず、大洪水を起こさないと約束されました。

そこには、時が来たら、主はご自身のひとり子を犠牲にすることによって、人を罪の支配から救い出すというご計画が秘められています。

神はノアとその息子たちを祝福し、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」(9:1)と、天地創造の際と同じ意味での新しい祝福を与えられました。ただ、その際、「あなたがたへの恐れとおののきが、地のすべての獣、空のすべての鳥、地面を動くすべてのもの、海のすべての魚に起こる」と新しいことばが加わります。

それは大洪水によって地球環境が変わってしまった結果、肉食を是認せざるを得なくなったからかもしれません。そのことが「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物となる」(9:3)と描かれます。

ただそのいのちは本来、神に属するという告白として「ただし肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない」(9:4)という限界が設定されます。それとともに、人の「いのちのためには、あなたがたの血の価を要求する…いかなる獣にも…兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである」(9:5,6)と記されます。

「神のかたち」を侵害する者に死刑を宣告されたのです。「血」は「いのち」の象徴であり、その支配者は創造主ご自身です。そして人の最大の罪は、いのちの支配者である神の権威を侵害し、自分を神とすることに現されます。

その後、主(ヤハウェ)は、「わたしは、見よ、契約を立てる、あなたがたとその後の子孫と…すべての肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない」(9:9,11)と言われ、「虹」を「契約のしるし」とされました。私たちは、「虹」を見るたびに、神が雨を降らせ、また止ませて、この地を守っておられることを覚える

ことができます。

なおこの契約の核心には先の「地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜がやむことはない」(8:22)という約束があります。後に預言者エレミヤはダビデ王家が永遠に続くという約束の確かさを、このノアとの契約を「昼と夜との契約」としてそれが守られ続けていると引用しながら保障しました(33:20,25)。しかもそれは、たった一人のノアの献げ物を、神が喜ばれたからなのです。

4. 「主が全地のことばをそこで混乱させた」

しかし、敬虔なノアも失敗します。彼はぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になってしまい、ハムがそれを兄弟に告げ、その結果、ハムの息子の「カナン」がのろわれます。ノアを尊敬することと、彼が常とともに歩んでいた神を尊敬することは切り離せないからです(9:20-27)。

なお先にノアは「正しい人」「全き人」と描かれてましたが、それとぶどう酒を飲んで裸を晒したことは矛盾しません。なぜなら、神の前の正しさとは、人間的な恥をさらさないことではなく、神との交わりのうちに歩むことだからです。

同時にイスラエル民族の父祖であるセムが、後の時代にカナンを支配し、そこにヤフェテも身を寄せることが記されます。

10章1節は「これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である」という定型句とともに、人間の増加が描かれます。そこではヤフェテの子孫がヨーロッパからアジアの全域に、またハムの子孫はメソポタミヤ、カナン、ナイル流域の肥沃な地に、さらにセムの子孫がメソポタミヤからアラビア半島に広がったと描かれます。

それぞれの終わりに「言語ごとに、その氏族に従って」と表現されます(10:5、20、31)。最後に「以上がノアの子孫の諸氏族である彼らからもろもろの国民が地上に分かれ出た」(10:32)とまとめられます。これらの名を数えると完全数である70になりますから、日本人を含め、この地の全ての民族がノアの子孫であることを現わしています。

ハムの息子のカナンが「のろい」を受けました。残念ながら親を軽蔑するという罪は、最も弱い息子に受け継がれる傾向があるからかもしれません。すべての日本人もノアの子孫であるならば、ノアを尊敬し、ノアと一体となることがなければ、のろいを受け継いでしまいます。

11章には全世界の国語が分かれた経緯が記されます。最初、「全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった」(11:1)と記されます。そのうち彼らは「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂きが天に届く塔を建てて、名をあげよう」地の全面に散らされるといけないから」(11:4)と言いました。

これは「地に満ちよ」(9:1)という大洪水後の神の命令に逆らうことです。彼らは一つの統一帝国をシンアル(現在のメソポタミヤ)の地に建てました。それは「ニムロデは地上で最初の勇士となった」(10:8)と言われる時だったと思われます。

ここに、神を忘れ、徒党を組んで人間の力を誇る生き方が見られます。ある意味で現代のインターネットの世界こそ、「バベルの塔」かもしれません。そこでは共通の基準(グローバルスタンダード)のもとで世界的に競走が激化し、神を無視した序列が生まれ、貧富の格差が広がりました。

その人間の傲慢へのさばきとして、「主(ヤハウェ)が全地の話しことばを混乱させ、そこから人々を地の全面に散らされ」ました(11:9)。

しかし、そこに主のあわれみを見ることもできます。なぜなら、「互いの話しことばが通じない」(11:7)ことは、一致を妨げ、争いの原因にもなりますが、画一的な尺度で人に優劣をつけることを差し止める恵みにもなるからです。

なお、ペンテコステの時、弟子たちみなが「聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた」(使徒 2:4)と描かれますが、それはバベルの塔の悲劇を逆転させることでした。それはことばが統一されるという奇跡ではなく、少数者の言葉を用いて福音を語るという多様性を生み出す奇跡でした。

それこそ罪人の姿となられたイエスの御霊を受けたしるしでした。そこでは、それぞれの個性や文化が尊重されつつ、対話が成り立ったのです。

11章10節からは、「これはセムの歴史である」という定型句とともに、セムからアブラハムに至る十代の系図が描かれます。そこでも5章と同じように「…年生きて…を生んだ。…を生んで後…年生き、息子、娘たちを生んだ」と九回繰り返されますが、「こうして彼は死んだ」ということばが省かれ、将来的な神の救いの計画が示唆されます。

その死を乗り越えた希望への転換の鍵が、神とノアとの契約なのです。

ノアの箱舟とバベルの塔をまとめて見ることを通して、「互いが互いを必要としている交わり」を覚えさせられます。現代のノア箱舟と言え、ラルシュ共同体を思い浮かべます。ラルシュとはフランス語で、箱舟という意味です。

バニエは重度の知的障害者とともに住む中で、自分自身が癒されてゆくという感じました。そして、あの世界的に有名な神学者であったヘンリ・ナウエンもそうでした。

私自身も振り返ってみると、いわゆる激しい競争社会の中で息苦しさを感、牧師への道を歩みだしました。そして、カウンセリングなどを通して、多くの生き難さを抱えた方々との交わりを築く中で、自分自身の心の闇を優しく受け止められるようになってきた気がします。いわゆる「世の成功」の価値観から解放されて、気が楽になってきました。

人々の心の闇に寄り添うことは「生きる」ことの根源に触れることができるからかも知れません。成功シナリオにとらえられていたときは思いもしなかった世界です。

現代のキリスト教会、それは新しいノアの箱舟です。暗く息苦しい箱舟の中には、兄弟喧嘩や嫁と姑の争いもあったことでしょうが、そのことはまったく問題にされていません。

「バプテスマ」は、イスラエルの民が主の栄光の雲に導かれ、紅海を渡って奴隷状態から解放されたことを思い起こすことです(1コリント 10:1,2)。またそれは、ノアが箱舟によって救い出されたことを思い起こさせることでもあります。

私たちも本来、ノアの時代に滅ぼされた罪人と同じです。しかし、新しい「箱舟」であるキリストの教会の一部とされることによって救われるのです。そこでは私たち自身が、世的な効率や生産性を目指すのではなく、ノアのように、「神とともに歩む」ことが求められています。それは、主との対話のうちに生きることにほかなりません。

ときに私たちは、「神様、もう耐えられません！」という試練に会うかもしれませんが、「神は真実な方です。…むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道をも備えていてくださいます」(1コリント 10:13)